

2. 大戸岳・閼川支流

労山福島県連盟の登山学校（沢登り教室）が7月8・9日に大戸岳・閼川支流で開かれた。当日は天候にもめぐまれ5本の沢を完登することができた。以下はそのうち我が会の会員が参加した2本の沢の記録である。

大戸岳D沢（仮称）

1978年7月9日

L西和文 渡辺京子 大戸幸務 独古 稔（会津労山）

大戸岳D沢（仮称）は高度差約600mを一気に流れ落ちている。A沢やB沢の記録からして多くの滝を期待して出発する。出合からすぐ5mの滝。右岸を捲いて上に出る。これは幸先がよいと勇んで登り出すが、期待に反してその先は平凡になってしまった。急沢で高度はどんどんかせぐが、ガラガラと音がせんばかりの浮石の上を歩くばかりで、滝など一つもない。いいかげんいやになった所で三つの連続する小滝（F2）となる。簡単に直登して先に進むがまた平凡。やがて二俣。左沢は切れこみは深いが水はほとんど流れてなく、右沢へ入る。すると今までと様相が一変。小滝の連続する快適な沢すじだ。6個の滝を次々に直登して気分をもち直す。急傾斜のナメを越え、小滝をもう1つ越え、水流はいったんなくなった。その先再び水流があり、小滝も1つ出てくる。もう沢は最後のつめの段階であって、すぐにヤブの中の登りとなる。いったん小屋根上に出て、20分のヤブこぎで稜線上の登山道に出る。

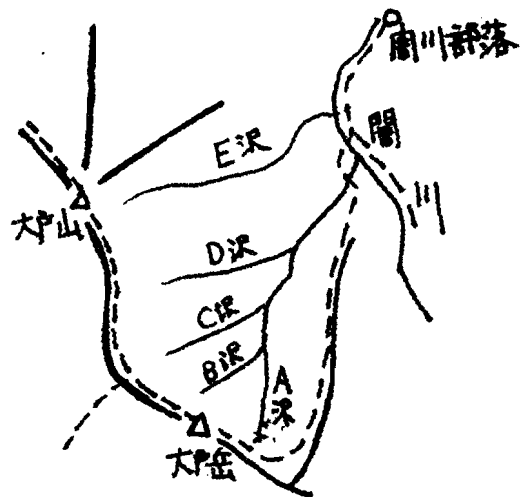
（記・西和文）

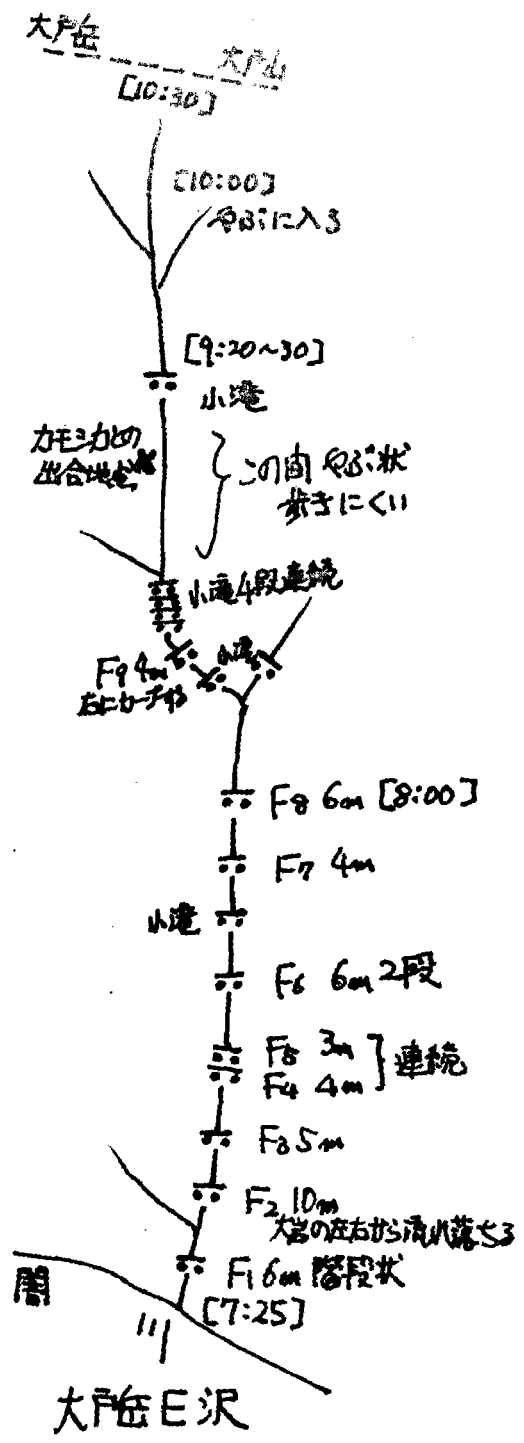
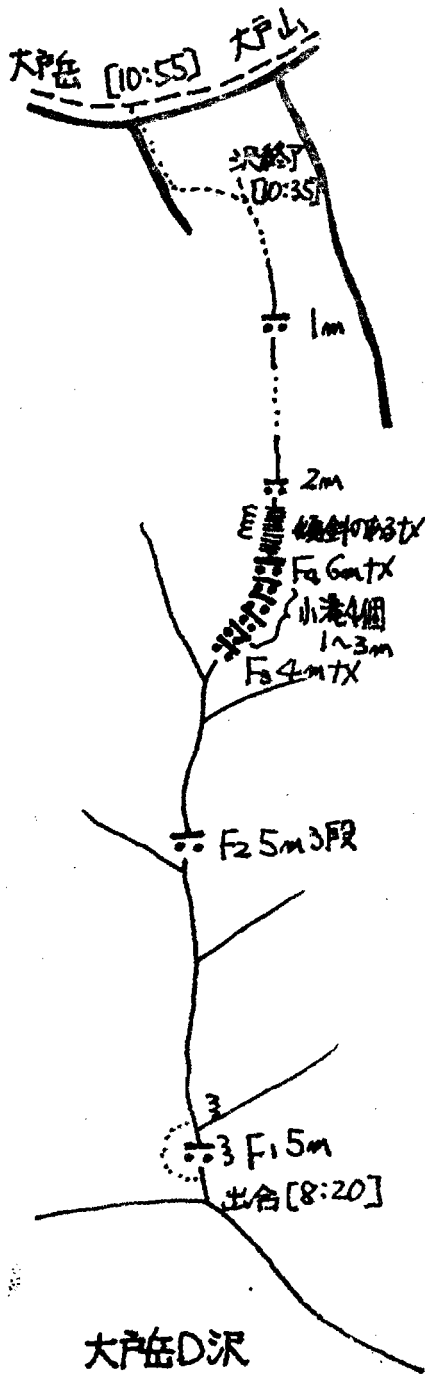
大戸岳E沢（仮称）

1978年7月9日

L森 慎吾 橋内憲治 菅野喜吉
遠藤晴子（郡山労山）

閼川そいの林道をやや進んだところのE沢出合で他のパーティとわかれ廻行開始。出合から斜度があるため、沢は階段状となり高度をかせぐ。階段状のF1をすぎるとF2が現われる。この滝は大岩の左右から流れ落ちており、





右側はクメ状で簡単に登れるが、足置らしに左側の滝を直登する。花岩のしっかりしたホールドがあり、それほど苦勞もなく滝口に登る。続くP3は5m程度の滝だが、シャワータイムを強いられ、すっかり体をぬらす。連続した2つの滝をすぎると、2段(下段が低い)のP6につく。左側から取りつき滝口にぬける。高度をどんどん上げながら登り、沢が左にカーブするあたりで左岸から支流が滝となって入り込んでいる。P8で、こんどは右にカーブし、小滝が連続したところをすぎると、やぶがかなさるがきにくい沢筋が変わる。傾斜もゆるくなり、左右から木の枝がかぶさり歩きづらい。途中、4~5mの至近距離でカモシカと出会う。この先はやや開けた沢筋となるが、もう滝もなく、ひたすら先に進む。右岸からの支流とわかれると、すぐ水がなくなる。急傾斜となった沢をつめ、やぶこぎをして登山道に出る。(記・森 慎吾)

3. 阿武隈源流・本谷と赤滝沢

昨年引き続いてとりくんだ阿武隈源流の2本の沢の記録を紹介する。会報「725」No.6の記録(白水沢・南沢・一里滝沢右俣)と合わせて参考にしていただきたい。

阿武隈源流・本谷

1978年8月27日

L西 和文 菅野喜吉 大戸幸研

甲子温泉より30分ほど右岸の林道を終点まで歩いて、6時35分沢に入る。30分歩くと雄滝。次の雌滝とあわせて右岸より高捲く。捲き道はかなりはつきりしてきていた。40分程で天狗滝沢分岐のすぐ下流に降りた。沢に降りる途中天狗滝が木々の間より見えた。2つ程小滝を越え、8時10分赤滝沢との二俣。赤滝沢の方が本谷より水量が多く沢床も低いので本谷とまちがえやすい。

二俣より本谷の方はすぐ滝が見える。この滝の左岸斜面を滝の方に向かってカモシカが通っていった。このカモシカの通っていった所をたどると楽に通過できた。トリカブトの花がきれいだ。ここらあたりから先ヤブこぎに入るまで随所に咲いていた。少し行くと小滝があり、そこを過ぎるとチムニー状の滝があった。滝のすぐ